

藤女子大学紀要, 第 48 号, 第 II 部: 177-182, 平成 23 年.
Bull. Fuji Women's University, No. 48, Ser. II: 177-182. 2011.

赤羽末吉「けちんぼおおかみ」論

— アイヌ民話を絵本にすること —

柴 村 紀 代

一、赤羽末吉と北海道

アイヌ民話「けちんぼおおかみ」は、「日本のむかし話」シリーズの 1 巻として、神沢利子・文で 1987 年 10 月に偕成社から出版された(図 1)。赤羽末吉が亡くなったのが 1990 年 6 月だから、ほとんどその晩年の作といえる。

赤羽末吉は 1910 年東京、神田に生まれ、日本画を 1 年ほど学ぶが以後独学。1932 年旧満州に渡り、美術関係の仕事をしてしながら満州国美術展に日本画を出品、三回特選を受賞した。1947 年帰国し、1961 年、51 歳で福音館書店の月刊絵本「こどものとも」編集長松居直に出会い、「こどものとも」58 号(1960 年 1 月)の「かさじぞう」で絵本界にデビューした。以後、日本画を基調とした流麗な筆致で昔話絵本を中心に、源平絵巻物語や神話絵本など、戦後の日本の絵本の興隆期に大きな足跡を残した。1980 年、日本人初の国際アンデルセン賞画家賞を受賞。1990 年 6 月 8 日死去した。

赤羽末吉がどのようにアイヌ民話を描き、北海道を取材したかについて、赤羽茂乃さんにお話を伺った。それによると、実はその頃、赤羽氏は軽い脳梗塞を起こし一週間程入院していたという。そのため、改めて北海道に取材に行くことはできなかったが、北海道には若い頃なんか来ているとのことだった。1954 年 7 月には摩周湖や網走まで足をのばしオホーツクをのぞみ、56 年、64 年にも羅臼、知床をスケッチした絵や写真がたくさん残されているという。又、1983 年 6 月 30 日の朝日新聞「日本の自然 100 選」に釧路湿原の「タンチョウ」の挿し絵を描いている。

これらの記憶を元に描かれた「けちんぼおおかみ」だったが、そもそもこの原話は、旭川のアイヌユーカラの伝承者杉村キナラブックの『キナラブック・ユーカラ集』(旭川叢書第三巻 1969)を元に、そのテープを聞きながら神沢利子が再話したものである。

杉村キナラブックは、明治 21 (1888) 年深川市生まれ、旭川市近文コタンの杉村コキシヤンクルと結婚。昭和 41 (1966) 年伝統工芸で旭川市文化賞受賞、翌年、旭川市無形文化財オйнаならびにトゥイタクの資格保持者になった。旭川叢書に『キナラブック・ユーカラ集』を収録するに際し、キナラブックの謡うオйнаを、杉村キナラブックの次女杉村京子と大塚一美が収録、筆記し、日本語訳をつけた。

「ユーカラ」は現在は「ユカラ」と表記されることが多い。「英雄叙事詩」と訳され、「雅語を使って折り返しをつけずに謡われる叙事詩」とある。「カムイユカラ」は「神謡：神が自らのことを語る話、サケへという繰り返し言葉がついている」。「オйна」は、金田一京助・久保寺逸彦によって「神伝」「聖伝」「聖典」と訳された範疇の口承の叙事詩で、ユカラのなかに含まれるとある。¹

「けちんぼおおかみ」は「オйна」に分類され、「狼神の殿が所作しながら述べたもの」とある。アイヌ民族においてはさまざまな生き物が神であり、物語も人間が語るのではなくシマフクロウやクマなどの動物だけでなく、川の神や沼貝なども神として語る。

この絵本のために再話した神沢利子さんに、オйнаを語ったキナラブックさんはすでに亡くなっていたがその次女の杉村京子さんと対訳を行った大塚一美さんとの仲介の労をとったのが、旭川の子どもの本専門店の福田洋子さんだった。

事前に取材に来られなかった赤羽氏だが、出版後、「けちんぼおおかみ」の原画展と出版祝賀会を旭川

で行う際、神沢利子さん、編集者の上田竜夫さんと共に参加され、翌日、旭川近郊の東川町キトウシ森林公園で、おだやかな秋の半日を過ごされたという。少し小高い原っぱからながめた四囲の山波が、ちょうどお話の山の中の絵とそっくりなのを殊の外喜んでおられたという。

二、原話と絵の関係

「けちんぼおおかみ」は、おおかみの災難の話である。はまべにクジラが打ち上げられているのを見つけたおおかみは、お腹いっぱい鯨肉を食べた後、一切れを銜えて山に戻ろうとする。その途中、遊んでいた男の子二人がおおかみを見つけ、ていねいにその肉を少しくれるように頼む。しかし、おおかみは子どもたちに分けもせず通り過ぎようとした。実はこの子どもたちは国造りの神の子で、怒った神の子はおおかみに呪いをかける。話の最後に「だから、けちんぼをしてはいけない」という教訓がユーモラスななかにもよくわかる楽しい話である。

「けちんぼおおかみ」の原話は、アイヌ語を逐語訳したもので、アイヌ語のリズムが感じとれるが、そのまま文にすると煩雑で読みにくい。また出だしには下記のようなサケヘと呼ばれる繰り返しことばがついているが、これも絵本では省略せざるをえない。

フーテンナフー ハオ ピシタ サパシ 浜辺に下りて
フーテンナフー ハオ フンペ リカ クジラの肉を
フーテンナフー ハオ チセヒネ 私は持って
フーテンナフー ハオ アイヌ コタン アイヌの村の
フーテンナフー ハオ ソイケ チクシ そばを通った。

しかし、原話のニュアンスを神沢利子の文はできるだけ残そうとしていることが伺える。例えば、原話の出だし「アイヌ コタン（人間の 村の）ソイケ チクス（そばを 通った）インカラ ウシケ（見ると）アイヌ チセ（人間の 家）」と続く一文に、「アイヌ コタン」「アイヌ チセ」とあるが、「アイヌ」とはそもそも「人間」という意味だから、ここを安易に「アイヌの村」「アイヌの家」と訳さずに、神沢利子の訳もそのことをきちんとふまえて「にんげんの村」「にんげんの家」となっている。

原話は長いので、文には書ききれないことを絵で補っている箇所がある。二人の男の子が狼を見つけ「兄 その子供 正座して 二度 礼拝し 三度 礼拝しながら 言うには 『最も重い神 汝のもつ鯨肉 ほんの 少し下さい』」というところである。「正座して礼拝する様」を赤羽は「男の正座は、あぐらをかいて座り、女の正座は、片足立て膝で座る」アイヌ民族の風俗をふまえ、画面左にその様を描いている。（図2）

三、「けちんぼおおかみ」の類話について

萱野茂の『ひとつぶのサッチポロ』²に「ススペチッチ ススペランラン」という話が載っている。フリという大きな鳥が海べに降りてえさを探すと、死んだ鯨が岸べに上がっているのを見つけた。フリがそれを食べているとアイヌの若者がやってきて、6日間6回ずつていねいに礼拝し鯨肉を分けてくれるように頼むが、フリは知らん顔をしていた。6日目に若者は怒り、呪いをかける。このアイヌの若者は実はオキクルミカムイで、フリは鯨肉を持って帰る際、柳の林、はんの木の林でずぶぬれになり、あかだもの木の根の網につかまって動けなくなる。そのフリの上に鳥やけものがふんや小便をかけて行き、体がくさって死んでしまった。「だからいまいるフリよ、食い根性を悪くしてはいけない」と一羽のフリが語った。という話である。フリは、「怪鳥フリーユ」とも呼ばれ、巨大な大鳥である。

ここでは「国造りの神」が「オキクルミ」になっているが、「けちんぼおおかみ」では「コタンコロカムイ」とあり、地方によって「サマイェクル」（石狩川系）、「アイヌラックル」（静内他）等とそれぞれ呼び名が違っている。

四、参考資料について

「にんげんの村を」とおりかかる」と「りっぱないえのまえて」「ふたりの男の子が遊んでいた」とあるが、この家はアイヌの住居チセである。木材で骨組みを作り、萱などで屋根と壁をおおう。この絵ではセムと呼ばれる付属屋もつけられた立派なもので、村上島之丞『蝦夷画帖』³を参考にしたと思われる。『蝦夷画帖』には、「カヤの家」「シラカバ樹皮の家」「クマザザの家」の三葉があり(図3)、これを複合して描いたものとはほぼ確定できる。この『蝦夷画帖』を赤羽がどこで見たかだが、この図説の入った『蝦夷生計図説』は1990年、北海道出版企画センターから出されており、赤羽は残念ながらこれを目にしていない。しかしこの『蝦夷生計図説』を部分的に収録したものに泉靖一編『アイヌの世界』(鹿島研究所出版会1968)がある。この『アイヌの世界』は、他にも参考にした跡がある。チセの裏にさりげなく描かれた枯れた木のようなものは幣場である。アイヌがイナウをまつって神に祈りを捧げる神聖な場であるが、これも同じく『アイヌの世界』のなかの「ソウヤ・アイヌの屋敷」(『蝦夷・カラフト・サントタン打込図 四巻』)⁴(図4)を参考にしたと思われる。

このチセの前で遊んでいる兄弟は、ほとんど半裸で、動物の毛皮のような上着をはおっている。その子どもの横に無造作に置かれたものはカリブと呼ばれるつる輪で、ぶどうづるを曲げて輪にし止めたものを、子どもたちは転がしたり、放り投げたりして棒で突き上げて遊ぶ。(図5)アイヌ絵の先駆者である小玉貞良の『蝦夷人遊獵図』⁵にこのカリブとオナ(槍)で遊んでいる図がある。(図6)この子どもの髪も半髪(はんこう)と呼ばれる前髪を残し前頭部剃髪し、後ろ髪を垂らすようなアイヌの子どもの独特な髪型である。

五、見返しのアイヌ文様と赤羽のデザイン性

アイヌの衣服には美しい文様が縫いつけられている。アットウシ(樹皮衣)と呼ばれる衣服は、オヒョウダモやシナなどの樹皮を糸に紡いで織った布だが、時代と共に木綿地に刺繍が施された衣服が作られた。この文様には渦巻や巴、波状線、括弧文様などが組み合わされ、左右対称に作られることが多い。しかし、絵本の見返しに描かれた赤羽の衣服(図7)は左右対称に見えつつ、少しずつ崩れており、また文様の線も丸みを帯びている。この衣服は木綿の生地と切り抜いた白い布で文様を作るカパラミヤ(図8)と呼ばれるもので、その置布を縫い止めて、さらにその上から刺繍したものはずだが、その白い置布と木綿の生地とが混じり合って生地と文様が逆に見える。また、これは衣服を衣紋にかけた後ろ身頃のスケッチだが、衿がないことや、おそらく前身頃の文様を見せるためか、衣服の前身頃を大きく開いた描き方だが、脇の斜め線が不自然なことなども指摘できる。

この見返しの文様が左右対称ではないこと、置布と地布との区別の不明確さ、波状線の頼りなさ、衣服の開き方の不自然さなどを見てみると、そこに逆に赤羽の十分にアイヌ民族の資料を探索した後の自由で闊達なデザイン感覚が見えてくる。

その闊達さは、おおかみの描写に特によく現れている。野生のおおかみのごわごわとした毛並みや鋭い目つき、とがった耳、そのしなやかな姿態など、単純な線なのにおおかみの野生味とその傲岸な生き方が多少のユーモアを交えつつ活写されている。

国造りの神の子が降りてくる図のあかね色の雲や小鳥たちの絵には、日本画の画風を想起させつつ、赤羽独特のデザイン感覚がよく生かされている。表紙絵とラストの絵が同じ場面でありながら、微妙に神の子達の姿が違うのも興味深い。

絵本におけるアイヌ民話の再話は、口承文芸であるが故のリズム感や、サケヘと呼ばれるくり返しことばの省略などで、文そのものもなかなかアイヌ民話のおもしろさを伝えることが出来ない。それに加えて、絵をつける際の、アイヌ民族の衣服や住居、道具類などそれらの考証に多くの時間をとられることとなる。そのため、現在もアイヌ民話の絵本化はあまり多くない。しかし、民話そのものは現代の子どもたちにも十分楽しめるおはなしである。今後、若い絵本画家たちによって、より多くのアイヌ民話

が絵本化され、アイヌ民族のおおらかな自然観が子どもたちにも豊かに伝わることを願っている。

最後になりましたが、この原稿を書くにあたり、赤羽茂乃さん、こども富貴堂の福田洋子さん、市立函館博物館の霜村紀子学芸員、函館市中央図書館長谷部一弘館長、(財)アイヌ文化振興・研究推進機構の秋野茂樹氏に大変お世話になりました。改めて御礼申し上げます。なおこの原稿は、絵本学会発行「絵本 BOOKEND」第7号（朔北社 2010）「特集生誕 100 年赤羽末吉」に「けちんぽおおかみ—— 闊達なデザイン感覚」として掲載したものに加筆し図を加えたものです。

注

- 1 田村すず子『アイヌ語辞典 沙流方言』草風館 1996 年
- 2 萱野茂『ひとつぶのサッチポロ』平凡社 1979 年
- 3 『蝦夷画帖』村上島之丞 1800 年代始め（文化年間）内閣文庫蔵 ここでは『アイヌの世界』（泉靖一／編 1968 年）から図を入れた。
- 4 『蝦夷・カラフト・サンタン打込図 四巻』日置卓也 1850 年代後半頃 早稲田大学図書館蔵 これも『アイヌの世界』からの図である
- 5 小玉貞良の『蝦夷人遊獵図』原本は水戸彰考館。函館市中央図書館の模写蔵より。この子どもがカリブで遊ぶ絵は他にもあり、伊藤春里筆「蝦夷風俗図巻」（ライデン国立民族博物館蔵）では、大人も描かれている。

参考資料

- 『キナラブック・ユーカラ集』旭川叢書第3巻 旭川市 1969 年
『キナラブック 口伝 アイヌ民話全集1』中川裕・校訂 大塚一美・編訳 北海道出版企画センター 1990 年
『蝦夷生計図説』秦憶丸・選 間宮倫宋／増補 村上貞助（秦一貞）謹誌 北海道出版企画センター 1990 年
『アイヌの世界』泉靖一／編 鹿島研究所出版会 1968 年
『アイヌ絵誌の研究』佐々木利和 草風館 2004 年



図1 絵本「けちんぽおおかみ」表紙



図2 子ども拝礼の図

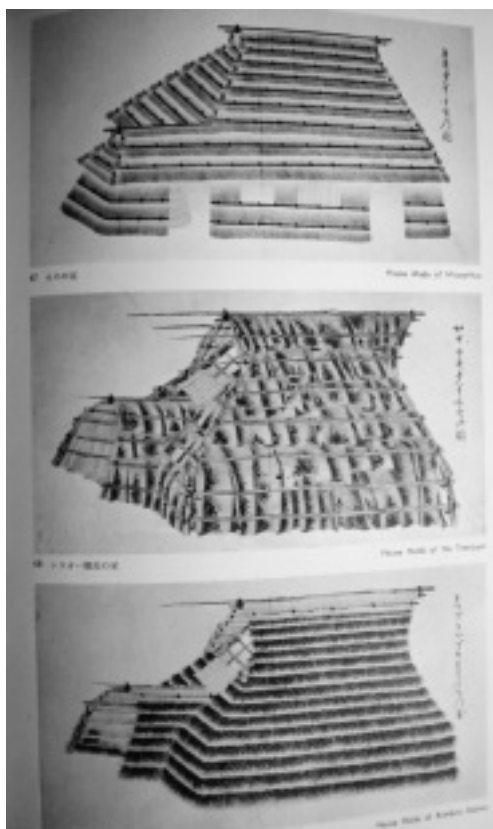


図3 チセ三葉



図4 「ソウヤ・アイヌの屋敷」ヌサ場



図5 子どもカリブ遊びの図



図6 小玉貞良の『蝦夷人遊獵図』

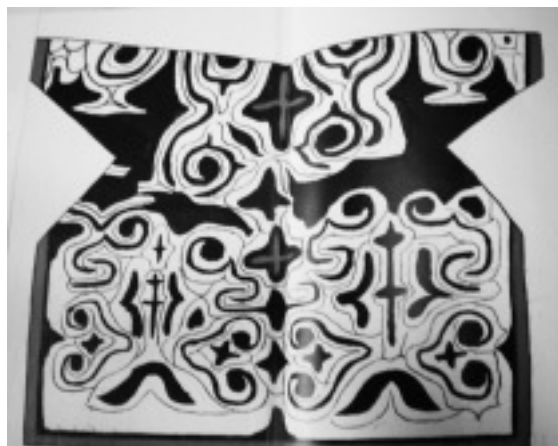


図7 絵本見返し



図8 「アイヌの世界」裏表紙より